おちほ

祝 第30号　平成10年1月30日　発行　社会福祉法人　椎の木会　落穂寮　発行者　山下　陽一

あけましておめでとうございます。いよいよ98年の幕明け。皆さんはどのようなお正月を迎えられたのでしょうか。落穂寮では多くの寮生さんが自宅へ帰り、家族と共にお正月を過ごしました。いつもは騒がしい寮内もこの時ばかりは静まりかえっています。でも寮にもちゃんとお正月はやってくるのです。

寮生さん2名と職員3名で迎えた元旦。『一年の計は元旦にあり』すがすがしく規則正しく7時に起床。5人でこたつを囲みアットホームな雰囲気の中、お炊事の先生手づくりのおせちを頂きました。おいしくて食べすぎて、思わず寝正月になりそうでしたが、そこをこらえてきちんと初詣へ。地元の白山神社と吉姫神社に参った後、京都の北野天満宮まで行って、三社参りをしてきました。あいにくの雨の中、大勢の参拝者にもまれながらの参拝となってしまいましたが、きっと御利益があることと思います。

さて、98年は落穂寮にとってどんな一年になるのでしょうか。どうか今年は成人施設建設の夢が実現できますようにと願わずにはいられません。新しい年、気を引き締めて参ります。皆様の御協力と御声援をよろしくお願い致します。

ふくし今昔

杉山の夢

理事長　増田正司

杉山の地と縁ができて10年ぐらいになろうか?、杉山寮もできて3年がたった。

今津町の特老施設「清風荘」の岸本荘長さんに案内され、栗の実が熟する仲秋の頃杉山をたずねた。つぎつぎ離散する住民を見おくり、ひとりだけ居のこった岸本さんは、ここが障害の人たちに役だつ場所にならないか考えられた。前からお世話してきた障害をもつ姉妹の将来の生活を、村の家をグループホームに転用して、同じ仲間たちと一緒にできないかと相談されてきた。

杉山をたずねた。一面のびほうだい伸びた草むらの中に立つと、自然にどっぷりつかった解放感で快適な気分にさせられた。青い空、ふかい緑の山なみ、ほとばしる渓流、黒い土、どれもこれもが病む心の痛みを癒してくれるにちがいない。都会の雑騒にもみくちゃになった弱いひとたちを優しくつつんで、ここに生活拠点ができるかもしれないと感じた。ふと、この野山に遊ぶ子らの姿がうかんできた。

▲平成2年 杉山の家ワークキャンプにて

毎夏、そばの国道をとおって小浜に水泳キャンプにでかけていたが、ここで林間キャンプができそうだと考えた。

北陸地方が豪雪のとき、ここも3mぐらいつもるようだ。長いつらい冬に閉ざされ、村人が離れていった。弱い人たちが、この気候風土のなかで暮らしていけるだろうか、障害の人たちの生活拠点と考えるために、しばらく生活体験が必要だ。

当分は、短期の夏季キャンプ利用ができると考えた。

たまたま、地域内で格安の家屋敷が売りにでていると知らされた。

10人ぐらいが宿泊できる広さの田舎家だ。寮から交代で出かけ、ここから冬のスキーや夏の海水浴に行く拠点にも使えると買うことにした。荒れるにまかせた家の手いれに職員と寮生がマイクロバスで毎日出かけた。何時にない重労働にくたくたになって職員が帰ってきた。往復、遠足気分の寮生はたのしそうだ。すべてが寮がかかえの「杉山の家」つくりが、毎日のしんどさから始まった。そのいとなみに寮内外からさまざまな反響をうみだした。賛否両論にゆれ、挫折の危機もあったが、寮内の後押しあればこそ、今日の杉山寮の発展へつながっていくことができたと思う。

（9・12・25）

ふくし今昔

ミッちゃんの思い

落穂寮長　山下陽一

新年明けましておめでとうございます。皆様のあたたかいご理解とご支援を受け、寮生・職員ともども新しい年を迎えることができました。

昨年は成人施設への改築につき、各方面の方々のご協力をいただきながら計画を進めてまいりましたが、今一歩のところで実現できませんでした。

年頭にあたり本年こそ改築計画の実現を確信し努力する所存です。何卒宜しくご指導ご支援賜りますようお願い申し上げます。

昨年の十月末、旧寮生が周囲の人たちに無断で落穂寮を訪ねてくれました。突然のことでとまどいと驚きと喜びの一時を過ごしました。

ミッちゃんは九年前落穂寮を退所して成人施設に移りました。自閉傾向があり、不満なとき「骨ポッキ！」「毒マンジュ食べる！」などといって職員がもてあましていたのを記憶しています。その彼女が訪ねてくれたのです。当日は早朝から、近隣の学校施設による一麦寮でのマラソン大会の準備をしておりました。彼女が退所して九年になりますと職員も知る人が限られてきます。遠くから様子をみるとよく似ているものの、この界隈には似た人をよくみるものですから、まさかという思いが先に立ち、ご本人ということが特定できません。一麦寮の横を通って落穂寮に上がり、所在無くうろうろしていたのでしょう。しばらくした後帰るつもりだったのか、十五分も離れたところで、三雲養護学校のY先生によってやっと「ミッちゃんじゃないの」ということになったのです。Y先生は十年近く前に担任をしておられたと聞きましたが、一緒に落穂寮に来られやっと分かったという次第です。さっそく施設に電話を入れて確認すると、「今は自宅に帰っている期間で、朝から大騒ぎをして捜しているところだった。すぐ迎えにゆくから宜しくおねがいします」と言う返事でした。それにしても訪ねてくれた私たちには嬉しいことで、本人に馴染みのある職員が入れ代り立ち代わり、「お腹は空いていないか」、「そのかっこうではさぞさぞ寒かったろう」、「お茶を飲むか」などの大サービスと大歓迎の有様です。

▲昭和61年頃のオチホリョウのメンバー（臨海学舎にて）

自分の気持ちを言葉に表わして訴えることが充分できない本人ですので、自宅に帰っていて何を思ったのかわかりません。おそらく早く目覚めて簡単に着替えし、裸足につっかけというこしらえで、約二時間、一生懸命落穂寮を目指して歩いてきたのでしょう。

私達は彼女のこの行動を思うとき、一緒に生活していたことの重さを感じます。その当時は問題行動に翻弄されたり、悩んだりしたものなのですが、本人も楽しいこともあったでしょうし、不愉快なことも沢山の生活だったでしょう。お便所は大丈夫かと誘導すると、「うん」とうなづいて心得顔で駆けていきました。

ようこそミッちゃん。

DREAMS COME TRUE. DREAMS COME TRUE. DREAMS COME TRUE. DREAMS COME TRUE. DREAMS COME TRUE.

わたしの明日を語る

DREAMS COME TRUE.

人は…人なり

石部南小　前山　茂治

落穂寮との交流も十数年経過した。あのころ教育の現場では、体験的な活動やボランティア活動という言葉はなかった。自主的・主体的に学ぶという言葉が流行していた時代でもある。そうした中で物を教え理解させるだけの教育に対して不満があった。子供には様々な能力があり、多様な実践的体験で子供の質が変わると思っていた。学校という枠に閉じこもるだけでなく、もっと大きいエリアの中で、様々な事を体験させたいと考えていた。

月一回必ず、いろいろな学級大会を、勉強以外での自己の存在感・居場所のある学級を考えていた。それは楽しい学級作りでもあった。

そうした中で落穂寮との交流を続けることができたことを大変嬉しく思っている。机上での、障害者に対する理解や、心情に迫る道徳教育だけでは子供の心は変わらない。常に実践する態度こそ大切ではないかと考えた。そうした活動を通して心に刺激と変革を求め、何かを考えるきっかけをつくり、何かを実践できる態度が身につけばと思っている。

神戸の震災で仮設住宅に住んでおられる人々に対して、花をあげたり、手紙を渡したり、地震の様子を聞いたりし、児童にとって充実した活動となった。また、北海道の岩盤崩落事故でも花と励ましの手紙を送ったりもした。子供たちは素直に受け入れ行動できる純粋な能力をもっている。それをどう引き出してやるのか、それが我々教師に与えられた使命ではないかと思う。

実践力のある子供たちの育成を通して、わたし自身様々な体験ができ、いろんな人々との出会いがあったし、活動の幅も広がった。

「人は人のために尽くしてこそ人なり」この意味を十分かみ締め自分なりに行動して行きたい。

▲落穂寮のトランポリンを使って後方宙返りをする児童

未来の町づくり

副寮長　中嶋　貴一郎

私が落穂寮の仕事について早や25年が過ぎようとしている。落穂寮の時の流れとともに、石部町の変化には驚きを感じている。

25年前、石部はまだ田舎の町というもの。石部の町はまだ素直さの残るたたずまいを残すところであった。落穂寮の回りに至ってはあたりに田と山が広がり昔ながらの集落がある程度であった。大津から移転して間もない落穂寮は、周り（地域）の人達には奇異な目で見られ、寮生がそばを通るだけで子供達は家の中に逃げるように隠れ、大人は遠巻きにして眺めるだけ、年寄りに至っては目を合わせるのもはばかるといった状態で、肩身の狭い思いをする日々が続いていた。そ

▲年長旅行で寮生さんと梨をほおばる中嶋副寮長

のときに私たちが考えたことは、いかに周りの人に理解してもらえるか、いかに受け入れてもらえるかであった。

私は大学時代に施設問題の研究の中で地域コロニーの書を読みあさっていたが、その中にドイツのコロニーのことが紹介されていた。その書によると、ドイツのある村に知的障害者のコロニーがあり、村の中に小人数の人が生活できるホーム『家』が多数点在し、そのホームの職員には地域の人あるいは受け入れた家庭の人があたるというシステムで、村の中に総合センター的な施設があり、総合的なケアーやホームのバックアップに当たっている。その村は、村全体がコロニーであり、村全体が障害者を受け入れ、施設やホームの運営や障害者のケアーに深くかかわっていると言うことであった。

今、石部の町には5つの施設、5つのグループホームや生活ホーム、3つの就労機関、1つの養護学校（甲西町）、そして、多くの協力企業と地域団体の存在、以上のように、この25年の間に石部の町は村から町への変化だけでなく、障害者理解の点でも大きく変化し、先に述べたドイツの村に一歩ずつ近づきつつある。

最近、遠方より見学に来られた障害者の保護者の方が話されたが、『石部の町は安心して歩けます。周りを気にしなくてもいいし、ジロジロ見られることもないし、肩身の狭い思いをせずに歩けます』

石部の町もやっとそこまで来たのか、と言う実感と、明日こそ健常者や障害者と区別する事なくお互いの存在が普通の日常であると言える町になる日を夢見て施設作りに取り組みたい。

国の障害者プランや県の淡海障害者プランにありますように、障害者の福祉施策の中心は「地域福祉」の流れとなり、施設整備は通所施設を、生活の場ではグループホーム・福祉ホームが念頭に置かれています。又「障害者市町村生活支援事業」も新たに加えられ、地域での生活、地域での働く場を重点としています。

世界中で一番信頼のおける母親に

保護者会役員　久保　厚子

その流れの中で、県内においては大津市の北部をはじめ、他の地域でも生活型施設の建設が望まれ、私達の落穂寮も成人施設化を目指しています。一見流れに添っていないように見える活動ではありますが、障害者プランが重点を置いている地域での生活は、現在のところその殆どが家族の介護に委ねられていて、安定した介護は期待できません。また、生活ホーム・グループホーム等や信楽からスタートした生活支援システムも、経験豊かな生活型施設がバックにあってこそ安定した運営や処遇が成り立つもので、その拠点となる生活型施設はこれからも益々大きな役割りを担うものと思っています。

人は皆どんなに重い障害を持っていてもいつかは自立し、親の元を巣立っていかなければなりませんし、また、それが可能な社会でなければならないと思います。本当のノーマライゼーションを行うにはその土壌となる地域社会の、障害者に対する理解と意識や、共に生活して行ける為の設備整備とOT・PT・ST・保母・保健婦・医師・更生（児童）相談所のケースワーカー等の専門家でチームを組んだきめ細かな相談・指導・処置等が行えるシステムが必要不可欠だと思います。そしてこれらをバックアップする生活型施設であって欲しいと思っています。

今後「障害者福祉発祥の地」と言われる滋賀県が、名実共に障害者福祉の先進地となり、障害者児全員がもっと充実した楽しい人生を送れるよう、また、安心して旅立てるように、私達親がしていかなければなりません。県内外でも色々な活動がなされています。よそを羨んでばかりいないで、進んだ制度を学び、芽生えつつある制度をより良いものにするように、私自身も自分の内にある情熱をかきたてて前進を続けたい。そして子供にとって世界中で一番、全信頼をおける母親になりたいと思っています。

DREAMS COME TRUE. DREAMS COME TRUE. DREAMS COME TRUE. DREAMS COME TRUE. DREAMS COME TRUE.

A棟元気いっぱい
——秋の阿星山ハイキング

平成9年9月15日、A棟阿星山ハイキングから、早や4ヶ月。時は秋をすぎ、小雪の舞う寒い時期になってしまいましたが、今回は季節はずれを承知の上で、秋のA棟阿星山ハイキングでの出来事を報告させて頂くことをお許し下さい。

さて、当日はとても気持ちのいい秋晴れ…とはいかず、朝から今にも雨の降りだしそうな雲り空。雨になったら体育館で、登ったつもりになってお弁当…となる予定でしたが、天気はA棟に味方した！雨は降らずなんとか持ちこたえ、皆無事に山頂まで登れたのです。

うさぎ組の健脚メンバーは寮からずーっと歩いて、道なき道を枝をかきわけかきわけ…途中人ひとりがカニ歩きでやっと通れるようなガケに、ヒャァと情けない悲鳴をあげながらも到着。ゆっくりさんチームのかめ組は山の中腹までマイクロバスで移動後、ハイキングコースから山頂をめざし、皆各々のペースで到着。皆でそろって食べたお弁当はとてもおいしいものでした。天候が悪かったせいで山頂はさらに肌寒かったのですが、皆は元気に岩の上に登って"パイ、ポーズ"。（下は崖）

そして、行きはよいよい帰りは…しんどかったのは職員だけでしょうか？寮生さんは疲れなんか全く見せず、いつも"元気！"なのです。

さあ、新しい年が始まりました。今年も元気いっぱいの寮生さん14名と、気だけは若い？職員6名ではりきっていきます！どうぞよろしくお願いします。

▲ 岩の上から「オーイ」

Cとう Aとう すいじ Bとう

頑張れ！裕美ちゃん

マイクロバス、車、病院が大好き。葉っぱや木の枝などの自然も大好き。笑顔、時々口ずさむ歌がとても素敵な裕美ちゃん。私たちにたくさんの思い出を残してくれました。退寮が近付いても今一つわかってておらず、退寮当日、職員は涙でしたが、裕美ちゃんは笑顔で落穂寮をあとにしました。

第二湖北寮でも大好きなことをたくさんして元気に過ごしてほしいと思います。新天地での活躍を期待しています。

ありがとう　裕美ちゃん。

ようこそ!! 三友紀ちゃん

九月からC棟に新しい仲間が加わりました。上西三友紀さんです。高等部三年生。C棟唯一の学籍さんです。笑顔がとってもチャーミング。甘え上手で職員が大好き。手遊びも好きで「あがり目、さがり目」「お弁当箱の歌」などレパートリーもたくさんあります。歌舞伎、能なども大好き!!と少し変わった一面も持っています。徐々にC棟の生活にも慣れてきた様です。色々なことを主張しつつ、これからも元気一杯過ごしてほしいと思います。

▲ひろみちゃん　みゆきちゃん▼

飽きのこない事務!?

今年度は"落穂の厄年?"と思わされるほど、一難去ってまた一難、「成人施設化への国の予算が取れない」から始まって、「補助金の減少」と、次から次へと、ほとぼりが冷めた頃に難題が持ち上がり、道のりの険しさを思わされます。

今秋、糸賀一雄記念の事業に少し関わらせていただいた時、糸賀先生がいくつもの施設を創設された事を知り（勉強不足でした）、年代は違いこそすれ、功績の大きさを目の当りにした思いです。寮生さん達の平均年令が高くなった今、成人施設化は、一日も早い建設を、とだれもが考えるところです。成人化ともなれば、システムの移行は、職員の寮生さんに対する今以上に密度の濃いケアの必要性となって表われてくるのではないでしょうか？。事務の職員としての立場からですが、現場の職員の働きやすさが、寮生さんの過ごしやすさかなと、感じるこの頃です。

さて、事務所の窓口には常連の寮生さんが、歩行前、歩行後、日課をぬけ出して、と来てくれますが、その時の対応が、楽しいやらパニックやらで、飽きのこない日々の中、事務をこなしています。寮生さんが随分ごぶさたすると、何やら気になったりもします。純真無垢な面を垣間見る事もあり、我を通す自分を顧みる瞬間もあって反省します。

きっと、現場の職員も私以上に、生活を共にしている分、情のある接し方をし、寮生さんの喜ぶ顔見たさで、熱の入った行事を毎回されているのだと感じています。

今のアットホームな落穂寮の成人化は、ぜひとも実現しなくてはなりません。

来年は、きっと、実の成る年でありますようにと願ってやみません。

めげのむこうがわ

「のんびり」はできない!?

朝、目が覚めると、ザーザーと外は雨。「あーどうしよう」と、その日一日の動きを考えるとため息が出てしまう。まず体を動かすことが安定につながる寮生さんが多いB棟。お仕事の日の雨は、職員もいいが、休みの日の雨は、職員共々つらいのです。

先日も朝から雨。時折ドシャ降りのひどさ。こんな時に限ってマイクロバスなし。午前中は装飾作りでごまかしたものの、度々向けられるキラキラ視光線攻撃に、つい目をそむけてしまうのでした。

たまの休み「のんびりとテレビでも見てすごそうな」。でもテレビを見ているのは、ほんの2、3人。…5分…10分。ボッポッと動き出す開拓人。何か面白い事はないかと動き回る。戸をバタン、バタンとさせて職員の気を引こうとする人。それを真似て大きな音でバタン。

▲おいしい団子をつくろう！

バタンとさせて職員の反応を見る人。戸を閉めてまわる人がいれば、開けてまわる人がいて、電気をつけて歩く人がいれば、消してまわる人がいて、見ている分には面白いが、そうは言っていられない。19人全員が楽しめそうな事。…結局、おやつ作りを全員することに決定。…かくして、それまでばらばらになっていた、好きな事をしていたみんなは、何も言わなくてもホールに集まり、一丸となっておやつ作りに参加したのでした。もちろん、みんな笑顔で食べてくれました。

「のんびり」という言葉は、体のいい職員のさぼり用語だったよ。

年長旅行（未知への体験）

A班は、大阪ドームでの野球観戦、フェリーに乗り淡路島にわたり淡路牧場へ行ってきました。バスに乗り込みいざ出発!!バスの中から見た大阪ドームはとても大きいものでした。中に入ると、いつもテレビで見ている球場がこんなに大きいものだったのかとさらに驚きました。私たちの席は、近鉄バッファローズの応援団のすぐそばで、その迫力にみんな圧倒されてしまいました。でも、寮生さんも徐々にその雰囲気に慣れ、いつの間にかその中で立ち上がり、応援グッズをふって応援する寮生さんもでてきました。テレビでは味わうことのできない実際のプレーの迫力を、肌で感じることができました。淡路牧場ではバターを作り、できたてのバターを試食したり、大きい牛を目の前に、ドキドキしながら乳しぼりをしたりしました。

この旅行では、普段の生活では経験できないような事が経験できて寮生さんたちの心の中にいろいろな思い出が刻まれたことでしょう。

▲視線はボール？観客？それともカメラ？

行って来たよ、見て来たよ

B班は「砂丘を見に行こう。」ということで鳥取までバスに揺られて行ってきました。1日目は蒜山高原でバーベキューを食べ、途中、梨狩りをし、おなかいっぱい梨を食べてから羽合温泉に到着。こぢんまりとした旅館で、のんびりと温泉に入りました。夕食は旅館の料理＋寿司のすごいボリューム。普段ならもっと食べたいという皆も今日ばかりはおなかいっぱいになったようです。2日目はいよいよ鳥取砂丘へ。一面に広がる砂を見てうれしくて駆け出す人、不安になるのか戻ろうとする人、淡々と砂の上を歩く人、それぞれに何かを感じながら砂を見つめていました。アッという間の2日間。帰りのバスの中では何を夢見て揺られていたのでしょうか。

▲とーっても広い砂場で大好きな穴掘りに満足！

食欲いっぱい・元気いっぱい!!

十月二十四日、二十五日と、私達C班は石川県の山代温泉へ行って来ました。その道中、金津の芝政でバーベキューを、二日目は小松の浜で地引き網、そして加賀百万石時代村にも行って来ました。一日目は芝政で昼食をとった後、少し休憩し、山代温泉「山下家」へと向かいました。宿に着くと、早速温泉へ。しかし、中に入ったもののいつもの感じと違う為か立ったままでいる人、そうかと思えばドボンと顎まで浸かっている人…様々な入浴シーンでした。夕食はとても豪勢で、見ただけで満腹になりそうでしたが、みんな驚く程食欲旺盛でした。その後はカラオケをして、部屋に戻りました。

この二日間、どこで食べる食事もとてもおいしく、たくさん食べる事が出来ました。みんな、たくさんのいい笑顔を見せてくれた二日間でした。（松本）

▲たべても、たべてもへらないよー！

泉

▽あけましておめでとうございます。旧年中は、落穂寮に多くの支援をいただき、まことにありがとうございました。本年は、昨年実現できなかった成人化の夢をかなえる年でもありますので、皆様のより一層の御支援・御協力を宜しく御願い致します。

▽昨年は多くの出来事がありました。政治不信、経済不安定（この影響で成人化の話がポシャったのですが）、犯罪の年少化、異常気象など、これから一体どうなるのか、とても不安な状態です。落穂寮の寮生さんも、その影響とは思えませんが、落ち着かない人が出てきています。職員一同、気を引き締めていきたいと思います。

木言（こと）

黙ってうつむいて座っている。地球をキャンパスに絵を描いている。ぼくのかけらで暇つぶしている。窓から何かを眺めている。みんなひとりで呟いている。声をかけてもきこえない。歩けたら、側に行ってあげられるのに。ただ見守るしかできない。ひとりでいたいわけじゃないよね。声をかけられる人は沢山いるから、もう少し、まって下さい。